

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 17日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20402054

研究課題名（和文）小規模校にオルタナティブ教育を導入する教育効果に関する国際協同研究

研究課題名（英文）The international cooperative study on educational effect to introduce alternative education into some rural small schools

研究代表者

伏木 久始（FUSEGI HISASHI）

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：00362088

研究成果の概要（和文）：

本研究では、過疎化が進行する僻地の学校教育の質を高める手段として、オルタナティブな教育方法を導入していく実践研究に取り組んだ。長野県内の僻地校をフィールドとして、各地域の素材を活かした教育内容を教育課程に編成し、学年枠を乗り越えた学習集団を教育内容に応じて柔軟に組織する実践モデルを提言した。また、学習内容・方法に関して、子どもに選択権を与えることで子どもたちの主体性と学習意欲を高めることも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I studied for the practice research that I introduced the education method that was alternative as means to raise quality of the education of the small schools of the depopulation district. I organized educational contents utilized each local materials in a curriculum as the unique contents of the remote small school in Nagano. And I proposed the practice model to organize the learning group which got over a grade frame in flexibility depending on education contents. In addition, about learning contents and method, I made clear that the way to give children the ability of self-learning and autonomy of learning, by giving a chance of decision-making about learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	7,000,000	2,100,000	9,100,000

研究分野：教育方法学，教師教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：小規模校，オルタナティブ教育，個に応じた教育，複式学級

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の教育現場では「個に応じた教育」を標榜する実践研究が様々な観点から取り組まれてきたが、一斉授業を前提とする教室環境のデザインと授業方法が定式化されている点を改革する動きにまで進展する実践

には至らず、一部の先進校においてのみ柔軟なカリキュラム編成や学習集団の作り方が工夫されてきたという実態がある。

本研究は、そもそも「個に応じた教育」とは何かという問いからスタートし、北欧諸国をはじめ一人ひとりの子どもの学習スタイ

ルにも着目したオルタナティブな発想での教育実践を展開している現場取材し、わが国の教育実践の改革に示唆を得ようとする動機を原点にしている。なかでも、過疎地の小規模校で教室内の児童数が一桁の小グループであるにもかかわらず、30人以上の教室とほぼ同じスタイルの授業が展開されている学校現場を数多く目にしたことが研究の目的意識を強めた。1学年複数学級で1学級30人以上の子どもたちが在籍する規模の学校が「標準」とされ、その規模が競争意識を高めて子ども同士が切磋琢磨し合うための必要条件でもあると考える教育関係者が多い中、小規模校ならではの教育方法・学習スタイルを積極的に考案してその有効性を出張していかなければ、全国の過疎地の学校は次々に統廃合を繰り返して地域から子どもを失う教育を加速化すると懸念された。

そうした状況において、長野県内の僻地校での研究授業の指導等を依頼されることが増えてきた現職経験のある教育学者の立場として、また北欧諸国の過疎地域の学校現場で働く教員らと協同研究を経験してきた研究者として、わが国の小規模校に従来型の一斉授業ではないオルタナティブな教育実践を導入したいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、全校児童生徒数や教職員数がきわめて少ない小規模校を対象に、少人数であるがゆえの長所を最大限に生かし、短所と考えられてきた教育条件を克服するための教育方法を、海外のオルタナティブ教育の発想を参考に、それぞれの地域の実情に応じてアレンジしながらよりよい教育効果を生むような教育方法をアレンジすることを目的としている。

具体的には、教科書準拠の標準的な年間指導計画に依存した教育課程を見直し、地域の実情に応じた教育内容・方法を教育課程に位置づけた上で、個々の授業レベルで一斉画一型ではない、個に応じた教育方法を開発していくことである。その上で、一斉画一式授業に代わるオルタナティブ教育の教育効果を子どもたち自身へのアンケートや保護者や教師を対象としたアンケートなどにより、その有効性を抽出することが最終目的となる。小規模校には小規模校ならではの良さを追究するところに意味があることを教育学研究的に明らかにすることで、本研究が社会的な意義を高めることになると考える。

## 3. 研究の方法

本研究の研究代表者は、長野県内の複数の僻地校の教育実践研究の指導者として携わっているが、そうした僻地校の一部を本研究の対象フィールドに設定する。また、北欧諸

国の僻地校の教職員との間に研究代表者がこれまでに構築してきた連携協力体制を活用しつつ、北欧型の「個に応じる教育」をヒントに、適用できる理論や具体方策を参考にする。そうした前提に立ち、以下の5項目に取り組む。

- (1) 小規模校・小規模学級および複式学級での学習指導に関する先行研究を整理する。
- (2) 学習スタイル論の最新動向を整理する。
- (3) 北欧諸国およびオランダの教育実践をオルタナティブ教育の観点から分析する。
- (4) 長野県内の僻地校の教育改革に参画しながら、北欧流の教育実践の導入が適切な部分に積極的にその学習スタイルを指導する。
- (5) 僻地としての条件を共有する北欧と長野の協力校におけるオルタナティブ教育の意義と教育効果に関して教員および子どもを対象とした意識調査を行う。

## 4. 研究成果

今後ますます進行する少子化によって、将来の学校像、授業観などが見直され、小規模校の利点を活かす教育が求められることが予想されるが、本研究では過疎化が進行する僻地の学校教育の質を高める手段としてのオルタナティブな教育方法を各地の実情に合わせて試行錯誤してきた。地域の素材を活かした教材を活用し、一人ひとりの個性や学習意欲を重視した学習スタイルを学校現場の実態に即して具体化した。その究極的なねらいは、学習者一人ひとりの学習意欲を高めて自己学習能力を高めることであり、そのためには教育課程の編成段階から学年卒を柔軟に乗り越え、学習集団を学級集団に固定する慣例にとらわれることなく、教育内容に応じて柔軟にグループを編成し、教育内容もある程度子どもに選択権を与えることが重要であることを明らかにした。

以下、本研究で取り組んだ内容を4点に分けて要約する。

### (1) オルタナティブ教育の事例分析

一斉画一型授業に代わるオルタナティブとしての学習スタイルの意義と課題を、国内外の学校参観や文献調査を通じて考察してきた。具体的には、オランダのイエナ・プラン校やスウェーデンのヴィットラ校、フィンランドのトゥルクおよびラウマの僻地校に加え、ユバスキュラ郊外の山村エリアの小規模校での実践を参観取材し、その一部を学会誌や大学の教育学部紀要等に発表した。また、4年次にはノルウェー北極圏付近の僻地校を訪ね歩き、5年次の調査では北欧諸国ではなくニュージーランドとインドネシアに調査地を移して追加取材した。これにより、北欧型の学習スタイルの共通点を抽出することができたと共に、オルタナティブな学習スタイルを理論化し、その理論を小規模校にお

いて実践に応用するための要件を検討することが可能になった。特に、インドネシアのカリマンタン島の僻地校での調査においては、東南アジアの過疎地の小規模少人数学級での生々しい教育課題を理解することとなり、教育理論や実践方法の議論以前に、教員養成や現職教員の研究のあり方を追究する必要性に直面した。

#### (2)オルタナティブ教育に関する文献研究

僻地小規模校での複式学級の教育方法や“個に応じた教育”のための教育方法に関する先行研究のレビューを行った。この中には、個性と協同性の両方を重視しながら自己学習能力を高めようとするイエナ・プランやモンテッソーリ・メソッドに関する文献の翻訳作業も含まれている。国内の先行実践でも、愛知県東浦町立石浜西小学校の「〇〇学習」の事例や東京都板橋区立大谷口小学校の「マイマイ学習」の事例を分析し、その特徴を分析した。

#### (3)長野県内の僻地校の学校改革への参画

長野県の栄村および信濃町など山間僻地の学校群に出向き、カリキュラムや学習指導の改革に指導者として参画した。そのフィールドは、長野県内の僻地指定地域であるが、本研究の方向性はこれらの地域の学校づくりや教育課程編成の取り組みと連動する点が少なくなく、科研費プロジェクトが社会貢献につながる機会として取り組んだ。それは、単なる学力向上事業としてではなく、自ら意欲的に問題解決に取り組む子どもたちの自己学習能力を育てるために、その人的ネットワークと教職員の研修のあり方について提言してきた。そうした活動の中で、従来の一斉画一授業ではない、個に応じた授業のあり方を提言し、カリキュラムや授業づくりのレベルで発想の転換の必要性を指導した。

特に、小規模校同士の学校統廃合を経て平成24年4月に小中一貫校を設立した長野県上水内郡信濃小中学校に指導講師として関わり、長期間の学校設立準備会議のプロセスに参画する機会を得たことで、僻地校が抱える教育課題を総合的に捉え直すことができた。また、最終年次に開発段階に入った個別学習評価システムは、地域の素材を生かした授業づくりとその学習評価をサポートするものであり、同時に子ども一人ひとりの学びの履歴を長期的にデジタル管理できるしくみである。信濃小中学校では、学習評価のあり方を地域独自のものに改革していくための試みとして、算数・数学を皮切りにそのデータベースの構築を手がけた。

#### (4)オルタナティブ教育に関わる啓蒙活動

出前講座や校内研修会での講演の際には北欧諸国の教育実践の特徴を具体的に紹介しながら、学校の中に求められる真のゆとりや教員の主体性・独創性、および学習者の目

線に立って問い直す学習指導という話題を提供し、一人ひとりの個に応じた教育に近づけるためにオルタナティブ教育を導入することの必要性を指導した。

小規模校にオルタナティブ教育を導入するための主な啓蒙活動の機会は以下の通り。

- ① 信州大学出前講座
- ② 信州大学教育学部附属の各校（長野小学校・長野中学校・松本小学校・松本中学校）の授業研究の指導講師
- ③ 各地区の指導講師（栄村教職員会、信濃町教職員会、両小野地区教職員会、上高井郡教職員会、長野市櫻ヶ岡中学校、文化学園長野高等学校、飯田市内の小中学校、大町市美麻地区、
- ④ 長野市社会教育委員としての活動
- ⑤ 長野県キャリア教育推進委員としての活動
- ⑥ 長野市西部中学校評議委員としての活動
- ⑦ 長野県内のPTA研修講座（長野県教育委員会生涯学習課主催）での講演

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

- ① 伏木久始編著、過疎地域の実情に即した小中一貫校づくりと教育課程の開発、平成23-24年度 国立教育政策研究所プロジェクト研究報告書、初等中等教育-018、1-119、2013、査読無し
- ② 伏木久始、学習評価のあり方を再考する、信教ブックレット、37巻、1162-1163、2011、査読無し
- ③ 伏木久始、学習集団を再考する、信教ブックレット、36巻、1134-1135、2011、査読無し
- ④ 伏木久始、子どもたちが学ぶ環境を再考する、信教ブックレット、35巻、1098-1099、2011、査読無し
- ⑤ 伏木久始、学ぶ側からの目線で授業を再考する、信教ブックレット、34巻、1068-1069、2011、査読無し
- ⑥ 伏木久始、フィンランドの教員養成の質を保証する要因、信州大学教育学部研究論集、第4号、2011、25-38、査読有
- ⑦ 伏木久始、複式学級の教育効果を生かした教育実践の可能性—スウェーデンのヴィットラ・スクールの「個に応じた教育」を事例として—、個性化教育研究、第2号、2010、14-23、査読有
- ⑧ 伏木久始、協働的な学びの指導者を養成するデンマークの教員養成、信州大学教育学部研究論集、第3号、2010、115-126、査読無
- ⑨ 阿部純・伏木久始、子どもが主体的に追究していくための教師の環境づくり—教師の

日常に目を向けて一、信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書、60-68、2010、査読無し

⑩伏木久始、地域の学校での職場体験と大学での演習を連携させる授業の教育効果、日本教師教育学会年報、第18集、2009、108-117、査読有

⑪伏木久始、朴淑子、中国の学校教育に新設された「総合実践活動」のカリキュラムの特徴、信州大学教育学部紀要、第121号、73-81、2008、査読無し

⑫伏木久始、実践研究の質を高める手だて、カリキュラム開発研究、第8集、15-19、2008、査読無し

〔学会発表〕(計15件)

① Masahiro Nakata, Tetsuhito Sakata, Hisashi Fusegi, A study of the relation between education policy and teacher education system -from a perspective of Japanese trends -, NERA (北欧教育学会), 2013.3.8, University of Iceland

②伏木久始、人口減少と中山間地域における教育について、長野市議会新友会二期議員同期会(招待講演)、2013.2.18、長野市役所

③中田正弘・坂田哲人、鞍馬裕美、伏木久始、教師教育者の位置づけと役割ーオランダ・デンマーク・アメリカとの比較を通じてー、日本教師教育学会、2012.9.9、東洋大学

④伏木久始、家庭学習で子どもにさせたいこと～教育科学の知見をふまえた学習指導～、長野県教育委員会・南信教育事務所 家庭学習充実研修(招待講演)、2012.7.31、伊那合同庁舎

⑤伏木久始、家庭学習で子どもにさせたいこと～教育科学の知見をふまえた学習指導～、長野県教育委員会・東信教育事務所 家庭学習充実研修(招待講演)、2012.6.5、東信教育事務所

⑥伏木久始、家庭学習で子どもにさせたいこと～教育科学の知見をふまえた学習指導～、長野県教育委員会・中信教育事務所 家庭学習充実研修(招待講演)、2012.5.25、松本合同庁舎

⑦伏木久始、家庭学習で子どもにさせたいこと～教育科学の知見をふまえた学習指導～、長野県教育委員会・北信教育事務所 家庭学習充実研修(招待講演)、2012.5.17、長野合同庁舎

⑧中田正弘・坂田哲人・伏木久始・鞍馬裕美、PROFESSIONAL GROWTH OF STUDENT TEACHER THROUGH LESSON STUDY AND REFLECTION, Annual Congress of the Nordic Educational Research (第40回北欧教育学会)、2012.3.8、デンマーク教育大学(Denmark)

⑨伏木久始、大学生がプロデュースする「総

合演習」の実践ー総合的な学習を指導する教員に求められる探究活動の経験ー、日本生活科・総合的学習教育学会、2011.6.18、岐阜聖徳大学

⑩坂田哲人、中田正弘、伏木久始、Teacher Quality Assurance on Pre-Service Teacher Education, Annual Congress of the Nordic Educational Research (第39回北欧教育学会)、2011.3.10、Jyvaskyla University (Finland)

⑪伏木久始、デンマークの教員養成におけるPBL型グループワークの試み、日本教育方法学会、2009.9.27、香川大学

⑫伏木久始、イェナ・ブラン校の学習スタイルで育まれる社会性と主体性の実相、日本教育方法学会、2008.10.11、愛知教育大学

⑬伏木久始、デンマークの総合学習のカリキュラムデザインと授業実践、日本カリキュラム学会、2008.7.6、鳴門教育大学

〔図書〕(計2件)

①三輪定宣、岩田康之、伏木久始、佐藤千津、吉岡真佐樹、高野和子、久保富三夫、北神正行、紅林伸幸、浜田博文、牛渡淳、矢野博之、『教職論』、学文社、2012、49-70(全208頁)

②伏木久始(編著)、信州発・大学版「総合学習」の展開、信州教育出版社、1-28/175-176(全177頁)、2012

〔その他〕

研究代表者の研究業績→機関リポジトリ  
<http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.jhLeWhLe.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伏木 久始 (FUSEGI HISASHI)  
信州大学・教育学部・教授  
研究者番号：00362088

### (2) 研究協力者

Irmeli Pietila  
フィンランド・ユバスキュラ大学附属学校・教諭  
研究者番号：なし

Matti Siipola  
フィンランド・ユバスキュラ大学附属学校・教諭  
研究者番号：なし

Raimo Nevalainen  
フィンランド・ユバスキュラ大学附属学校・教諭  
研究者番号：なし

Tuire Palonen  
フィンランド・トゥルク大学・教授  
研究者番号： なし

Riitta Korhonen  
フィンランド・トゥルク大学・ラウマ校・  
教授  
研究者番号： なし

Marie Haga  
スウェーデン・ヴィットラスクール・  
Gerdsken 校・学校長  
研究者番号： なし

Annika S. Bergqvist  
スウェーデン・ヴィットラスクール・  
Kronhusparken 校・学校長  
研究者番号： なし

Fusae Takasaki Ivarsson  
スウェーデン・ヨーテボリ大学・教育学  
部・講師  
研究者番号： なし

Maj-Lis Sjobeck  
スウェーデン・ヨーテボリ大学・教育学  
部・副学部長  
研究者番号： なし

Lars Stubbe Arndal  
デンマーク・フレデリクスベア教員養成大  
学・講師  
研究者番号： なし

John-Erik Bang  
デンマーク・フレデリクスベア教員養成大  
学・講師  
研究者番号： なし

Ko Melief  
オランダ・ユトレヒト大学・IVLOS 研究所・  
教授  
研究者番号： なし